

二十世紀後半の学校にとつての大きな課題である。

この課題解決のために、新しい教育のメディアを開発し、活用しなければならないが、差しあたつて利用できるものは、テレビとテーピング・マシンである。さらに最近アメリカで問題となつている टीम・テーピング、システム・アプローチなども研究を要する問題である。

学校教育の中で、教室教師の役割の重要であることは言うまでもないが、それと並んで、どういふ他の人格を、教育的活動の中に、いかに豊富に採り入れ、またいかに有効に活用するかといふところに、新しい時代の教育にとつて重要な課題があるといふべきである。

### 系統的教授＝学習理論のいくつかの基本原則について

女子栄養大学 柴田 義松

1. 科学の体系を教授すること（知識の習得）と科学的態度の形成
2. 科学の論理と子どもの心理

現代数学のカテゴリーの子どもにおける発生（ピアジェ）

3. 分析と総合

教材分析の徹底と分析的学習。構造とシミュレーション。直観教授の再検討

4. 一般と特殊

教科内容の構成（系統性）における一般 特殊の原則と子どもにおける概念形成の運動

### 教授＝学習過程の構造化にもとづく能率

お茶の水女子大学 吉田 昇

近代教育がはじまつてから、教授＝学習過程の理論は二つの方向に分化しながら発展してきた。そのひとつは自然権にもとづく生徒の自然成長という考え方であり、他方は（功利主義にもとづく）知識の確実な定着ということである。前者が学習過程に着目し、後者が教授過程を強調してきたことはよく知られている。

この二つの流れのうち「能率化」ということは、とくに教授過程を重視する立場から主張されてきた。ベル・ランカスター以来、近代学校は工場生産とのアナロジーによつて時間と経費の節約をめざしてきたのである。

最近にいたつて、広汎な中等教育の普及が課題となり、機械装置のオートメ化などによつて新しい技術の使用が可能になると、再び能率化への動きが高まつてきた。ティーチング・マシンなどによる教授＝学習過程の革命といった標語は、その方向を示している。

もちろん、こうした技術の導入は、教授＝学習過程のムダをはぶき、その進歩をたすけるのに役立つ面をもつているが、しかし、それが近代の教育の遺産の一方だけを強調する結果、能率化によつて失われる面がないようにじゆうぶんの配慮をする必要がある。

この配慮は、能率化へのくふうを部分的なものに区切つたり、不徹底のまま終らせることを意味するのではない。むしろ、二つに分れていた教授と学習のプロセスを一つに構造化し、主体性をもつた人間の形成という立場から、それぞれの機能を位置づけその総体を能率化することが先決問題とされなければならないのである。

こうした構造化の試みは、ヘルバルトにもみられ、デイーステルウエクにもみられ、さらには、最近のオルポートのパースナリティーの理論やルビンシュテインの人格の解釈にも見出される。それらは完成したものとはいへないが、こうした統合の方向のなかに能率化が位置づけられなければ、現代社会の矛盾に対処するための方法は出てこない。

教授＝学習過程の能率化は、近代のなかでは、二つの流れのなかの一つで主張されてきたが、現代の時点でいうと、正しい意味で近代の遺産を継承するために、近代教育の他の一方の流れのなかで意図された望ましい面をもうけとめ、両者を総合的に能率化していく時期にきているといえよう。その意味で、近代主義的な能率化の促進と同時に、その限界の克服についての展望がすすめられなければならないのである。

## 学 習 能 率 化 の 問 題

東京学芸大学 五十嵐 清 止

### そ の 問 題 性 に つ い て

むだなく効果的に、ということは、およそ学習とか教授という教育活動には欠くことのできない本質的な要請である。それが、今日、特に問題とされるについては、充分な理がなければならぬ。私は、この問題を、学習能率観の変遷という史的観点と、時代背景ないし社会的観点の両面から、問題の所在とその性格や領域などの輪廓を描いてみたい。

#### 1. 教授・学習の能率化

一定の知識や技能を教授するに当つて、もつとも効果的にむだなくおぼえ込ませ修得させる方法の研究。